
105円のキス

クロカラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

105円のキス

【Nコード】

N3505E

【作者名】

クロカラス

【あらすじ】

105円のパンをもらった中学生が妙な女子中学生に巻き込まれていく話だったり

プロローグ

俺は、今年中3になった中学生

黒崎 イズミ

極めて平凡な中学に通っている

そう

うちの学校は高校までエスカレーター式なのでうちの学校は、お世辞にも優秀な学校とはいいい得ない。

もちろん部活だつてそんなに盛んなわけでもない。

まあ、一応バスケット部に入つてはいるが・・・

バスケット部は、唯一の穴場的部活だったのだが、何の間違いか今年になつて指導熱心な先生がきてしまったのだよ。

実に迷惑この上ない。君も思うだろ？

そのせいで試合・練習の量、ともに去年の2倍

そのおかげであんなやつに出会ってしまったのだ。

だからその点についてはやつの上履きに画鋲を10個ずつ入れたい衝動を日々押さえつける努力を日夜励んでいることを表彰してもらいたい。

さて

そろそろ始めるか？

面倒だが・・・

用具室で二人つきり

確か、あの日は太陽が猛烈な勢いで働いていた日だったと思う。ちよつど試合の日で弁当を持って現地解散と先生が言っていた。

「黒崎、飯忘れんなよ」

友達が俺にだけ釘を刺してきたからよく覚えている。

その日の試合は当然滞りなく終わりさて弁当を食べようと思ったら・

そう忘れてしまったのだよ。

まあ、現地解散だし食わなくても別にいいのだが腹は減るし、何より俺にもプライドというものがある。

何しろ試合先の女子バスケットと一緒に食べるということだったからな。

これでもいい暇をもてあますヤングアダルトたちが彼氏・彼女を作るといっても過言ではない。

当然俺も欲しくないといつたらうそになる。

どうしようかと途方にくれていると突然上から声が降ってきた。

「ゴハン忘れたのっ？」

弾むような澄んだ声だった。

「じゃあ、あつちで一緒に食べよう」

そういつて体育館の用具室に連れて行かれた。

。いろいろな物が置かれているが決して狭くは無い

彼女は跳び箱の近くで腰を下ろした。

部活動生はみんな制服に着替えてるため彼女ももちろんスカートだ。それなのにあぐらをかきやがったよ。

目の前に男いるんだぞ？

ただただ俺は呆然とするばかりだった。

「パン、分けてあげよっか？」

とりあえずここは素直に

なんたつて食糧確保の為だ。

「くれるの？」

そういつたらにやっとして

「安くないよ。なんたつて貴重な食料を分けるんだからね。」

「金とんのかよ？」

「いいや、そんなことする人に見える？ま、いいやおなかすいてるんでしょ？」

そういつてでかでかと105えんと書かれたパンを投げてよこした。

そして俺たちはしゃべったりしながら食事をした。

もうすこしで食べ終わろうかというときに

「さてと、そろそろ代金をもらおうか」

そういつて俺に近づいてきた。

そして突然口をふさがれた。

えっくと

これはキスっていう対人作法ですよね。

俺は自分がなに考えているかわかんなくなってきた。

そのうち彼女の舌と思しきものが唇を通過し歯を割って俺の舌と絡み合った。

それを10分続けただろうか？

彼女がぷはっといって唇を離れた。

俺が文句を言おうとすると・・・

ああ、こいつ馬鹿だ

黒い瞳が俺の目の前にあって、その顔はすげえかわいくて思わずみとれて・・・じゃなくて

「なにしゃがんだてめえ」

ここで極力怒りを抑えて言った俺は天才じゃなかるか？
だがさらにこいつは

「ん？代金」

馬鹿だ！こいつ本物の馬鹿だ！みなさーんここに馬鹿がいますよ
！！！
と言いたいのを悟りを開いた坊さんのように心の中だけに押しとどめてと

「どこにパン（105円）一個だけで健全的男子中学生のひそかに取っていたファースト・キスなるものを14年間取っていた唇を奪うやつがいるんだ？」

「ん〜こいつ」

うはああっ

なぐりてえ

つてかもういつそ・・・

なんてことを考えている間に第二陣がきましたよ。
ハイっ

また口ぶさがれてました〜

しかも今度は後頭部分に手を回されていてさっきよりも強くなっているう！！

あつ

もうだめだ冷静に考えられない。なんかぐるぐるといろんな情報が俺の脳をウォーターライダーのごとく駆け抜けてった。

えくと

まずここは埃がかぶっていることから察するに人があまり来なくて次に年頃の男女がいます、んでもって目の前にはランク的に言うところと最高レベルの中の女（俺基準）がいて、それで俺の唇をふさいでしかも自分の口で、手とか布とかではなくて、だから俺の唇にはそこはかとなくやわらかいものがくっついてるのであつてしたがって俺は声を発することができなくてしたがって次第に力が入らなくなつて……

7

ここまで来てようやく俺は開放されて後ろのマットへそのまま倒れた。

なんかあちいな

冷たいマットが心地いい

俺ハタから見たらおもしれえ〜んだろーなあ〜とここまで思考が回ってきたところでガバツと起きた。

一言言つてやる為だ。

そう

俺は必殺の一言を言つてやる

いくらさつきから人の唇を奪つてやるやつにだってこの一言は聞くはずだ……

さあ息を大きく吸って眼をつぶって

「病院行け!!」

しゅん

あら？

ん

あれしゅん

恐る恐る眼を開けると

突然

「あははっ、ちよっ、クク病院逝けっつて」
えらく大笑いしたやつがいたよ。

みんなどこへ？

1分後、やっと冷静に（ここでは落ち着いてしゃべることと定義）
になったよ。

落ち着いたら馬鹿にしたような眼で

「あたし真顔でそんなこと言われたの初めてだよ。」

何だろうね？こう、哀れむような切ないような眼で見られると泣き
たくなってくるね。

俺にはわかる！

同年代の男子にはつらいんだって絶対

「わかった。わかったからそんな眼で見ないでくれ。」
何かをかみ締めたね。俺は

イヒヒって笑顔で

「どうする？なんかみんな帰っちゃってるよ。」

は？

なに言っちゃってるんだこいつは？

こんなに人の話し声がするじゃないか。

ん？

んん？

しない？

俺たち以外の話し声がまったくしない。
恐る恐る扉を開けると・・・

ハイ、誰もいませんでしたー

「あはhrはIn」

俺の意味不明な言葉が体育館に響く。むなしい。

「はいはい。日本語でしゃべろうね。」

うそだろ

いつ帰ったんだよ

みんなーーーーーカムバックーーーーー

時計を見ると用具室に拉致られた時間から約45分過ぎていた。
しかし前向きに考えよ俺！

大丈夫！！

まだ太陽君絶好調

改めて時計を見ると

幸い、まだ1:55

Ok十分

さあ家に帰ってクーラーつけて有意義に読書でもしよう。

この暑い中わざわざ行方不明になった友人たちを探す必要もないし
何より俺には休息が必要なのだ。

うんうんと頷いていると・・・

「なにぶつぶつ言ってるの?」
こいつの存在忘れてた。

「今日のスケジュールを組みなおしてたんだ。うん、じゃあ俺今から帰るのでそーゆー事で
ハイさよーなら。」

回れ右をする俺をアイツが俺の髪を引っ張って止めました。

休息が一刻も早く必要な俺は

「何か御用ですか?」

アイツは笑顔で

「こんなところにレディーを1人にする男がどこにいるの?」
なんて言ってきやがった。

ふっ甘い。そいつあチョコレート+クリームみたいに甘いな。

(もつとも俺はクリームは嫌いだ。全国のクリーム好きすまん。
どうしても好きになれん)

「れでいー?どこに?」

俺はあたりをキョロキョロ見回した。

どうだっ? 参ったか? 精神的攻撃、イズミ選手主導権を握ったああ
!!

だが・・・

アイツの行動は俺の想像を凌駕していた。

俺の頬を両手で挟んで自分の顔の目の前に持ってきて笑顔で
「ここにいるでしょ。」って言ったよ。

うはぁ負けた。
勝てる気がしねえ

「じゃあ俺にどうしろと？」

するとアイツは俺の想像を斜め上をドギャンと行く答えを返しやが
った。

「とりあえず、君の家に連れてってもらおうか。」
うん、ふざけるなと声を大にして言いたいね。

「なぜ、お前を俺の家に連れってってやらにやなんのだ？俺には
そんな義務も必要性も否めんのだがな。そこんこ是非教えても欲
しいんですがね。」

するとアイツは

「ヒドイ。あたしの唇奪っついてそんなこと言っんだ」

「なに言ってやがる。そりゃこっちのセリフだぞ。」
なに言ってるかね。

この子は、いよいよ救急車が必要かね？

「とにかく、帰らせてもらおう。」
そういつて身を翻した。

すると後ろからアイツが抱き付いてきた。

いきなりでポーズンとしてる俺に耳元でアイツがささやいた。

「連れてかなかつたら、犯されたって言ってやる。」

うん、もうワケがわかんないよね。意味不明。なぜに？
あっそうか、脅迫されてるんだ俺。

うん、納得納得・・・じゃねえぞおい

「なに言ってる。俺はそんなことはしてねえぞ。」

よしよし

それでいいんだ黒崎 イズミ

よく言った。お前は勇者だ。

「じゃあ、つれてってよ。」

ううむ、こいつもラスボス並みに強いな

だがっ俺は負けんツ・・・

しまった。こんなときにきたか・・・

「うあつ・・・」

俺はうめいた。

そう、持病の頭痛だ。参ったねこりゃ

「ちよつ、大丈夫？」

何だ、心配してんのか？

かわいいところあるじゃねえか。

「俺のカバンから薬とってくれ。白い袋だ。」

わかったとだけ言うとカバンのほうへすっ飛んでがさごと探して

持ってきた。

あいつはそのままどっかいったかと思うと、自分の水筒と思しきものに水を汲んできてくれた。うれしいじゃねえかこのヤロオー

しばらくするとだいぶ楽になってきた。

ダメだ。こんな暑い中こんなとこにしていると倒れる。

よく見りゃ二人とも汗かきまくってんじゃねえか。

ちっ、しょうがねえ。それにもし俺が倒れたときに周りに誰かいた方が生存確率も高くなるだろう。

それに助けられたら断れねえじゃねえか。

「しょうがねえ。お前、家に来るか？」

これが、アイツがはじめて家に来た日だった・・・

変人の名前は？

俺の家はその学校から電車を20分ほど乗ってそこからまた15分ほど歩いたところにある。

駅でベンチに座って電車を待っているときにアイツがアイスを買って、買ってとうざかったのしょうがなく自分も含め2つ買った。

アイスを食べるときにふと、思った。

俺こいつの名前知らねえー

「なあ、一つ聞いていいか？」

「んつなに？」

おいおい、アイスなめながら話すなよ。

「お前の名前なに？」

思い出したように

「あっそうか。あたしまだ名前教えてなかったっけ？」
そかそかという風に

「あたしの名前は黒沢 遥」

ハイ、類まれな変人の名前が今明らかに

それにしてもクロサワ ハルカね。
もう少しドォーンと変わった名前を期待していたのに少々拍子抜け
かな。

「あつなにその平凡って感じの眼は」

おっと顔に出てたかな

まあ『れでいー』に名乗らせておいて俺は名乗らないのは失礼だし
なと思ひ（俺って紳士）

「俺の名前は 黒崎 伊澄。気軽に伊澄さんってよんでくれていいぞ」

「ハイハイ。イズミね。あたしはハルって呼んで」

ちっ、さんを抜かしてるぞ。おい

「何で遥の『か』は抜かしてよばせようとするんだ？」

俺は疑問を口にした。

「2つ理由があるよ。1つはハル「春」の季節が好きだから」

「もう1つは？」

「エへへ。トップ・シークレット」

頭をバシッとたたきたくなかったがまあよからう。

俺の心は太平洋並だからな。

そうこうしてる間に、電車が来た。

電車の中は学校帰りの高校生で埋まっていた。

俺達は20分間必死に耐えたね。夏のこの時間は絶対乗らないと深く心に刻みながら。

それから15分夏の猛攻撃に耐えながらひたすら家への道を歩いた。
その15分という時間はハルがしゃべり続けていた時間でもある。
アイツバケモンか？

「さっ家に着いたぞ」

さあこいつがどういう反応を見せるかな？

コーラ・ミルク？

ちらりと横を見る。

こいつなりに驚いてると俺は見た。

自慢じゃないが（いや、自慢じゃないといったらうそになるか？）うちそこらの家よりもでかいんだよ。一軒家でね。周りの家と見比べると3倍はあるね。庭も広いし芝生だし。

俺は気取って

「何ぼけつとしてんだ。まああがれ。」

そういつて家に入れてやった。

幸い両親も居らず兄貴も弟もいなかったので気兼ねすることなく部屋に入れた。

（兄弟の紹介はまた後日しよう）

「なんか飲むか？たいていのものはあるが、何がいい？」

「コーラ・ミルクある？コーラと牛乳を6：4で」

さすが変人。飲み物の趣向も常人とはかけ離れている。
うまいのか？

「6：4とかわかんねーから自分で作れ。ホレ、そのの棚からグラス2つとって。」

「うはぁマジで金持ち？部屋にMY冷蔵庫って初めてみたよ。」

そうかい
まあいい

確かコーラと牛乳もあつたはず・・・
俺は部屋にある冷蔵庫の中を探した。

5分後俺たちは床に座りながら俺はオレンジジュースを、ハルはコーラに牛乳を入れたものを飲んでた。

コーラ・ミルクとはミルクティーに炭酸の泡をプラスしたものだと考えていただくと大体あつてる。お世辞にも良い色だとはいい難い。
俺がそのコーラ・ミルクなるものを見ていると

「飲む？コーラ・ミルク？」
と聞いてきた。

コーラ・ミルク、うまいとは思えん。

「誰が、そんなもん飲むかつ」
普通の人なら大概がこう言うだろう。
飲もうという気が起きる人は病院に行くことをお勧する。

「まずいと思つてるでしょ？」
当たり前だ。

「色と飲む人の変人ぶりを如実に味を物語つているといえるね。」

「まったく、食わず嫌いは・・・飲まず嫌いかな？」

「なんと言われても、飲みたくないものは飲みたくない！」

そういうとハルがニヤニヤしながら俺に

「ちよつとイズミ、グラス置いて」

疑問を持ちつつも俺は言われたとおりにした。

置いた瞬間、両肩ドンツと押されあっけなく後ろに倒れた。

立ち上がるうとしたら、ハルが俺に覆いかぶさるようにして俺にキスをした。

そのうちハルの舌が、俺の唇をあけた。

その瞬間俺の口の中に何かが流れてきた。

俺は多分コーラ・ミルクだなと思いつつ仕方ないな、と思いつつから飲んだ。

ん、不味くはない？

コーラの炭酸のみを薄めた？ 的な味で嫌いではない。

ハルがどいてくれそうな気がないので、眼を瞑ってみた。

何も見えない中でハルの舌が俺の舌を絡めているのがわかる。

「んん・・・」

時々声が漏れる。

5分、10分経つただろうか？

ようやくハルがどいてくれた。

俺とハルの間には淫らな糸ができていた。

ハルは自分の指で糸を切りながら少し不安そうに俺に聞いた。

「何で、いつもみたいに文句言わないの？」

そんなハルに俺はこう答えた。

「そんなにイヤじゃなかったからな。それにコーラ・ミルク？もそんなに不味くなかったしな」

そういうとハルは、笑顔で

「じゃあ、もっとやる。」

と口を近づけてくるあいつの額にでこぽんしてやった。

コーラ・ミルク？（後書き）

この話に出てきたコーラ・ミルクというものは作者が好きな飲み物です。

友達に言つとドン引きでしたが、興味がある方はぜひやってみてください。

どうなっても知りませんが・・・

一人の部屋で（前書き）

前までの1ヶ月に1話を改め週に2話くらいを目標に更新しようと思えます。

あくまで目標なので、期待されるとちょっと・・・

一人の部屋で

それからの時間は、俺の部屋でテレビを見たり、漫画を読んだりしてすごした。

まあ楽しかったといえれば楽しかった、かな？

6時くらいになったところで、電車が無くなるって事でハルは帰った。

別れ際メイドと電話番号を交換した。

ハルはメールしろよって俺に念を押した。

帰るときにハルはまた俺にキスして帰った。

外だったので、ディープじゃなかったのと周りに誰もいなかったことを俺は心から感謝した。

つたく、つくづくキスが好きなやつだな。

ぜってえーアイツ、キス魔だな、と思いながら家に入った。

部屋に戻ってグラスやら本やらを戻した。

散らかっていたので、少し本格的に掃除をした。

おっと

潔癖症だなんていつてくれるなよ。

もともときれい好きなんだよ。俺は

やっと掃除が終わって、ベッドに横になって今日あった事を思い出してみた。

みんなでわいわい言いながら電車に乗って、試合やって、昼食のときにハルにあったんだよな。昼飯忘れてなかったらあいつと話す

ことも無かったのかな、なんて似合ねえぜ。俺

ハルのことを思い出してみた。

初対面の人と2人つきりになったり、キスしたり。何考えてんだかわかんねえしよ。

けどアイツのおかげで助かったこともあるよな。と思いつつも性格のほうは、普通じゃねえよな、と思ったね。

そこまで考えたときに俺は思った。

何で俺が、あいつのこと考えてんだ？

初対面の俺にディーブまでかましてきたやつの事なんか考えてんだ？

ってかもう会うことも無くなるのかな、と思うと少し残念なような気がした。

アイツ誰にでもあんなことするのかね、と思いながら俺は寝ていた。

ピッピッピッ

ピッピッピッピッ

ん？うるさいな。

携帯がなっていた。

ハルからだった。そういや、まだハルの着信音決めて無かったっけ、と思いながら携帯をとった。

メール(前書き)

初めて1日で3話更新できてよかったです。

メール

ハルからのメールは

『なにしてた？』

返信してやるか。

『寝てた』

『ご飯食べた？』

そう聞かれて俺は自分が夕食を食べていないことに気づいた。

『そついや食べてなかった。今から食べる。』

『そつ。たんと食べといで』

お前は誰だよ。

『ああ。食べてくる』

『そつそつ、明日部活あるっ』

『明日日曜だから無い。』

『遊び行くよ。』

『おいおい。俺にも予定つてもんが・・・ないな。何時に来るっ』

『9・・・30にイズミの家に行くよ』

『オーケー』

『じゃ、あたし明日の準備するからこれで』

『ああ、また明日な』

『明日、しっかりおしゃれしてきてね。あたしとイズミの初デートなんだから!』

何言ってるんだこいつは？

『またどさくさにまぎれてそんなこと言う!。』
一応反論してみたがメールはもう帰ってこなかった。

下に下りて遅い夕食を食べた。

とりあえず明日に備えて寝よう。

携帯に時間は・・・7時でいいか。

では、おやすみ

ってさつき寝たから寝れるか(ぜってえー興奮して眠れないって事は無かるう)

天井を見ながら考え込む。

でもハルが、今までとはまったく違う女って事は俺にもわかる。

今までの女ってなんかこうおんなじ様なことばっか考えて、なんか楽しくなかった。

でも、ハルはなんか違う。

別にどう違っかって聞かれるとうまく答えられないけど・・・
ハルが好きか？と聞かれてもそれもうまく答えられない。

だけど、誰かにとられたくないってのはある。
それが恋愛感情といえるかは、別として。

まあ今はゆっくり決めていこう。

きつと、きつと今は優柔不断でも許されると思う。
そんなことを考えながら、眠りについた。

ハル、訪問（前書き）

すみません。

最近だらだらしちゃって・・・

明日HPが、回復してれば続きを書かせていただきます
予定は未定ですが・・・

近日公開

ハル、訪問

その日は7:30におきた。

目覚めは最悪の悪夢とともにだ。
汗をびっしょりかいていた。

なぜ？

そんなの決まっている。

昨日寝るまで考えていたことだ。

俺が？アイツを好き？

ありえない。

昨日の俺はどうかしていたのかもしれない。

でなきゃ俺は、自分の思考回路を呪うぜ。

さもなきゃ俺は、なんのためらいもなく今ここから窓を開けて飛び降りるぜ。

いやいや、落ち着け俺。

いつもの俺を取り戻せ。

そうだ

今日俺は友達と遊ぶだけ。

オーケー？

もう一度だ。

と・も・だ・ち・と・あ・そ・ぶ・だ・け
よーしいいぞ。

さあハルが来るまでの約2時間
リラックスだ。

ん？

ちらりと開いてるカーテンから人影が見えた。

カーテンを開けてみると門の前にハルがいるじゃないですか。

いやいやいや

9時半だろ？約束

早すぎ。

このまま無視してもよかつたのだが、世間でよからぬうわさが、
ためとも限らないので俺は家に入れてやることにした。

ふー、深呼吸

いざっ、携帯をとりメールを打った。

『いつまで門の前に突っ立ってんだ。さっさと家に入れ。』

それだけ打つと、鍵を開けに下に下りた。

すぐに、ハルは家に入ってきた。

うちの親は、休日だろうが、深夜だろうが仕事、仕事な人たちの
でとりあえず誰にも会わなかった。

俺はハルを部屋に入れると、

「どーしたよ。ハル、こんな早い時間から？」

ハルは怒ったようにな、不安なようなくわからない・・・いや、俺が理解できてないのかもしれないが・・・

「ふつうさあ、こんな格好の女の子にあつたらさあ『かわいい』とか『きれいだよ。』とか言つもんじゃないのかな。」

なるほど、スカートと上のシャツがとてもあっている。

「わあすごくかわいいー」

ん？

気づけばハルが、俺のほうをじつと見ていた。

「もしかして寝てた？まさかそれで遊び行こうって人はいないよね？」

そっぴや、寝巻きの浴衣を着たままだった。

「当たり前だ。ちよつと着替えるから部屋を出てくれ。」

「いやいやいいよ。見るから。」

何言ってるかね？この娘は

と思っていると勝手にクローゼットを開け始めた。

「うわっ和服とスーツばかり。しかも黒ばかりか。あ、白衣？」
やめる。冗談抜きで。

そこにはパーティー用の寝巻きがかかっているだけだぞ。

「お前、ちよつとヤメ・・・うおっ」

俺は脱がされシャツを着せられた。

「お前は変態かッ？」

無視

次にストラックスを穿かせられた（まあこれは自分なだけどな……）

「ちょ……いい加減にしろって」

尚も無視

ハルは俺にネクタイをさせようとしているんだろうが、俺の背が高くてもうまくいかないのか、それとも単にハルが不慣れなのかで悲惨なことになっていた。

つてか俺の首絞めてる。（わざとか？こいつ）

「わかった。落ち着け、なっ、自分でするから」

そこでようやくハルが離れてくれた。

「まったく……ほれっ」

ネクタイを結びなおした。うんサキホドとは比べ物にならないくらい美しい。

「へえ〜結構似合ってるじゃん。」

「まあ親の仕事の関係でパーティーとかにやよく行くんでな。つてか普通の服はこっち。」

そういつて俺はタンスの方から服を取った。

「あの、着替えるんで〜部屋から出てってください。」

今度は、ハルも了解したのか部屋から出て行った。

すばやくタンスにある服を着替えて、スーツを直した。

ドアを開けるとそこにハルはいなかった。

「あんの馬鹿」

誰に言うでもなくつぶやいた。

探すしかなかるう。

と、思ったらベランダの窓から外を見ていたのですぐ見つかった。

ハルが何かしゃべろうとしていたが、俺はすぐその口をふさいで部屋に連れ戻った。

「むぐ・・・な、何？」

「何？じゃない。この家には俺以外の奴だって住んでるんだ。起こしちまうだろーが」

「あ、そか。ゴメン、ゴメン。イズミ以外の人に会ってないから忘れてた。」

「まあいい。つーかお前、今日どこに行くんだ。」

そう、俺は、まだどこに行くかすら、聞いてない。

「どこって、そりゃもちろん遊園地でしょ。」

遊園地、そっぴや最後に行ったのって小学校低学年以来だっけ？

「じゃあ行くか？今から行きゃ開園くらいだろ？」

「そ、じゃあ行こうか？」

こうして俺たちの初デート？（俺は否定に1票）は始まった。

初デート？でバトル！（前書き）

このページは今までの倍くらい長いです。

それで

誤字脱字があれば指摘していただけるとうれしいです
よろしくお願いします。

初デート？でバトル！

ぬかった。

電車を使ったのだが、出勤するサラリーマンたちの大群に俺たちは圧倒され仕方がなく次の電車を待つこととなった。

その間暇になったので、しばらくコンビニで涼ませてもらうことにした。

コンビニで俺はおにぎりを、ハルはオレンジ・ジュースを・・・
そして、その代金は俺の財布から出された。

駅前でおにぎりを食していると電車が来た。
今度の電車は時間が通勤時間外なのか学生が多めだが座れないことはなかった。

電車にゆれに揺られて30分

遊園地に着いた。いやぁーもう疲れちった。

そんな俺とは、対照的にハルは早く入りたくって仕方がないみたいだった。

いざ入園！！

さすが、デートや家族サービスに大人気の施設ベスト10入りはする遊園地。

いやぁー人が多いのなんのって
帰りたくなってきたぜ。

そんな後ろ向きな事を考えていると早速ハルが俺の手を引いて絶叫系に行きました。

まあ俺も苦手じゃないね。

15分後、前言撤回。

俺がちつちやい時に乗ったのは、こんな過激なものでは・・・ハルは、また俺の手を引いて・・・うおっ、そちらはまた絶叫系じゃないっすか。

ん？

楽しい遊園地にしちやガラの悪いあんちゃん、ねーちゃんが多いな。会合でもあんのか？

まあせいぜい絡まれないよう努力はするか。絡まれたらそんなときやそんなとき考えるか。

それからしばらく恐怖を味わった後、昼食タイムハルによると、午後からは絶叫系には乗らない予定らしい。実に喜ばしい。ナイスだぜ。ハル

俺は、食欲がなかったが無理やりハンバーガーを押し込んだ。

つーか、何でこんな体の悪そうなもんしかないんだ？

和食が食べたい俺としては残念で仕方がない。

(世の中のハンバーガー好きすまん。あくまで個人的な意見だ。)

昼食をとり終わった俺たちは、今度はお化け屋敷に行った。

ここだけの話、俺はお化け屋敷に行くとき非常にまずい。

友人との肝試しのつもりで入ってみたお化け屋敷で俺は脅かしてく

る物、人問わず大笑いしてしまつてドン引きされた男だ。
友人曰くお化け屋敷より俺のほうが怖かったらしい。

そんなわけで、俺にとってお化け屋敷とは絶叫系以上に入りたくない。

が、ハルが許してくれるはずもなくお化け屋敷に手を引かれた状態で突入してしまった。

まず、青い顔したおじちゃんが出てきた。

俺は必死に笑いをこらえようとしたがその前にハルが、大笑いしていた。

俺も笑いをこらえるのが馬鹿らしくなつて2人で大笑いしながら進んでいった。

幽霊役の人はさぞかし驚いていただろう。

お化け屋敷から出ると

「笑いすぎて酸欠になりそう。」

「笑いすぎだろう。お前は」

なんて言い合うくらいはできた。(俺も相当きつかったが)

それからは、ゆったりと買い物をしたりマスコット?的なものを見たりしてすごした。

そろそろ家族づれのかたがたが、帰り始めた。

閉園まで後30分という時間だった。

ハルが最後にどうしても、といって2人で観覧車に乗った。

終始無言だったがもう少しで頂上というときにハルが

「今日、どうだった?」

と聞いてきた。

俺は素直に

「今日は一日中振り回された疲れた。」
といたね。

「そういう時はうそでも『ハルと居れて楽しかった』とか言わないかなあ？」

何を言ってるんだかね？

「自分で言ってるで恥ずかしくないのか？」

俺は冷静にツツコンだ。

「うるさいなあ。その口ふさいでやる。」

とか言ってるキスしてきた。(いや、もう慣れたけどね)

俺もおとなしく目を瞑って唇を重ねた。

しばらくしてハルが唇を離れた。

確かにもうすぐ下につく。

いつまでもキスしたままじゃ従業員の人に、驚かれるだろう。

下についた。

そのまま俺たちは閉園間際となった遊園地を後にした。

もうすぐ駅というところで、数十人の不良たちが俺たちをつけてきた。

ハルもすぐに気づいたようで俺に目配せした。

どうも俺たちが、並みの中学生以上に豪快に金を使うのを見ていたらしい。

いや、都会は怖いなあ

参ったなあ。

ここは地元じゃないし暴れるのには構わないが、こちらには幾分不利だ。

何しろハルを守りながら、というのはきついだろっ。

が、しかしそんなことも言ってられないんじゃないか？というほど増えてきた。

俺が思うに30人前後と見たね。

いや〜な気配が伝わってきますよ。

つてかまだ集まってきてんな。

なんて考えていたら

「そこのお二人さん。」

なんて声をかけてきた。

「はい？」

俺は返事をした。

顔を見ると、さつき遊園地に居たおにーさんやおねーさんがちらほら

「僕たちにお金を貸してくれないかなあ？」

うはっむしりとる気だよ。

ストレートだな。

「生憎、あんたたちにやる気はないから、失せな！ー！ゴミども！ー！」

てつきり怖がつてると思っていたハルが、いきなりこんなこと言い出すので驚いた。

おいおい、ハルさん。そいつあちよつとまずくないかい？

「***」

「*****」

すっかり、意味不明な異国スタイルの言葉となった不良君。

さっぱりわからん。

これを不良語と命名しよう。

そんなことを考えているうちに数名の不良君が襲ってきた。

「*****」もちろん不良語とともにね

こう見えても俺はけっこう強い（割と病弱だが・・・）

うちの家系は代々武術を学んできた。

俺も例外ではない。

14という年齢ですでにいくつかの古流武術皆伝。さらに空手も初段くらいかな。

さて久々に暴れるか

ハルを守りながらつーのは厄介だけだな。

と思ったらなんとハルが飛び出してあつという間に3人倒した。

驚いてるとまた2人倒した。

マジで？

それにあの動き

ありゃ鳳龍院心拳や八極拳、八卦掌その他もろもろの動きが組み合わさってる。

おっと

こうしちゃ居られん。

俺も久々暴れんとなまってるからな・・・

「オラッ」

15分後俺らの周りにはざっと30人程度の山ができた。

まだ居たが手は出してこなかった。

「そこのお前、病院に運んでやったら？仲間なんだろう？」
と聞くと逃げていった。

（まあ所詮寄せ集めだわな。）

仕方なくしかるべきところに連絡して俺らはその場から退散した（
誰だって面倒はイヤだろ）

ハルと俺は急いで駅に向かった。

帰りの電車はすいていたので気兼ねなく話せた。

「なんで、お前あんなに強いのか？」

当然の質問を試してみた。

「イズミだつてすごく強かったじゃん。お互い様だよ」
尚も俺は食い下がった。

「いや、ハルのほうが3人多かった。」

「よく見てらっしゃる。」

俺たちは笑いながら帰っていった。

休日終了

ハルとの怒涛の休日は過ぎまた、新しき週がやってきた。

こうしてみるとつくづく俺が動かんでも時間は流れることを思い知らされる。

俺は地球の偉大さに気づく。

というのも、実は昨日ハルと駅で別れた後家に帰り久しぶりに家族全員とはいかなかったが

家族と食事をした。

その席で我が父

つまり現黒崎家当主 黒崎 時澄（クロサキ トキシミさん）と読みますよ。一応（ ）からマジかよ！と言いたくなることが告げられた。

「イズミ、もうすぐ夏休みが始まるな？」

そうなのだ。

後三週間ほどで夏休みがある。そのころには最後の試合も終わり最高の長期休暇を得ることができる。

「そこでだ、私の友人であり、また師匠でもある男の家が国の作る建物のエリアに入っていて

立ち退かねばならなくなったのだ。」

そりゃ不幸な話だな。確か公共の福祉だっけ？公民で習った。

「この家は部屋のあまりもあるし何より広い、一家族増えたところ
でなんてことはない。

私としても恩返しをしたい。だからこの家に住ませようと思ってる
のだが、いいかな？」

うん

親父としては恩を返しておきたいってのもあるんだろうが、それ以上友人だからな。

うちの親父は義理堅いからな。助けたいんだろう。

まあ当主の言うことに逆らうものはいないからな

「よし。では三週間にはここにつれてくる。」

その日はそれで終わった。

休日の次の日の学校はなぜにこつもだるいのだろうか？

多分永遠の謎だ。

土曜日、非常にも俺を置いていった薄情な友人が、ニヤニヤした顔で「どうだったあ？」などと聞いてきたので、「別に」とだけ返しておいた。

その日も普通に終わり普通に部活があった。

そんな日が2週間たった。

最後の試合が終わり（2回戦負けだったが）暇をもてあましていた俺の部屋に兄貴がきた。

黒崎 武澄（クロサキ タケスミ）俺の兄貴だ。

「イズミ、ちょっと稽古付き合え。」

俺は、わかったとだけ言うのと動き易い服に着替え道場へと向かった。

俺の武術は4割親父に5割兄貴に、そして後の1割は祖父に学んだ。小さいときは俺と兄貴は親父に学んでいたが、兄貴が大きくなるにつれだんだん兄貴に学ぶようになっていった。

おっと、着いた

うちに2つ道場がある。

1つは家の離れにある拳法や柔道などに使う畳の道場
もうひとつは武器を使うための道場

俺たちがいるのは畳のほうの道場だ。

そこで2時間俺と兄貴は拳をぶつけ合ってた。
畳に寝転んだとき兄貴が

「あと一週間だな。親父の友人が来るの。」

俺は「そうだね」とだけ言っておいた。

「親父の師匠か、どれくらい強いんだろっな？」

「さあ？ すごいんじゃない？」

「楽しみだな。俺も教えてもらおうかな？」

「そう。俺はパスだね。」

やっぱ厳しそうだからな。

まったく兄貴は武術が好きだな。

大学のサークルも総合武術部の部長やってるし。

「さっ、飯食いにいくぞ。イズミ」

そうして俺たちは道場を後にした。

師匠誕生

次の日の土曜、俺はハルと会っていた。
いや、正確にはハルがうちに来た。

それはハルが、うちの家族と初めて会った日だった。
(とはいっても弟の希澄だけだが) ちなみに我が弟はキスミと読みますよ。

「へえー弟居たんだ。よろしくね。」

「はじめまして。黒崎 希澄です。」
はい、ご挨拶、我が弟ながら偉い。

「イズミ兄ちゃん、この人誰？」
すまん、我が弟は小3だ。

「ん〜とね、兄ちゃんの友達。ところでキスミだけ?。」

「そうだよ。僕も遊び行くね。」
そうして黒崎家には俺とハルのみとなった。

とりあえず道場行こうぜ。
そうなのだ。あのデート(いや、遊びだけ)からいつか、手合わせしたいと言っていたのだ

「やっぱ、金持ちだね。」
おいおい

第一声がそれかよ。

「じゃ早速やるか？」

「オーケー、かかってきな。」

まずは、六大開「頂」

「はあっ……」

俺は、渾身の力で打ち込んだ。

かわされ……俺の頬を風がなでた。

俺の頬から血が噴出した。

まさか……強い！！

俺はほぼ本気でやったが5分後汗をかきまくって倒されていた。

「お前、強いな。」

「まっ、このハルちゃんを普通の女の子だと思ったら大間違いだよ。」

「そうかい、俺の腕もまだまだな。」

「そんなことないよ。普通の人の何倍も強かったよ。」

「そりゃうれしいな。」

これは正直な感想だ。

「よかつたら教えてあげようか？」

「何を？」

「ん、戦い方」

「そりゃうれしいな。」

まあ、こいつの腕は本物らしいからな。

「ただし、練習中はあたしのことをマスターと呼ぶこと。」

「はいはい。マスター」

そうしてその日はハルに2時間ほど鍛えられて帰っていった。

ハル旋風ここにあり

その晩、ハルから電話がかかってきた。

その日のあいつはやたら暗い声で、

「今度引越すことになったんだ。」

俺は、ハンマーで殴られた気分になった。

「結構遠いところなんだって。んでもう会えないかも……」

今度は上空1000mから突き落とされたような気分になった。

「引越すって何処に？」

あいつからの返事は

「わかんない。外国じゃないって言ってたけど。」

「でも、日本のどこかなんだろ。じゃ大丈夫だ。1日、2日で会えるからな。」

俺の声が震えてるのが自分でもわかる。

「でも、すぐには会えなくなるよ。ごめんね。功夫教えらんなくて。」

「まあしょうがねえよ。大丈夫だって。俺はいつでもここにいるか。」

そついうとあいつの笑い声が聞こえて

「あははっクサイよ。いまどきそんな事言うなんて。」

「そうか？まあお前が笑ったからよしとするか。」

「フフ。アリガト。元気でた、じゃもう切るね。遠くに行ってもまた電話するね。」

「おお、いつでもしろ。じゃあな」

そういつて、電話を切った。

ベッドに、ドサツと横になると俺の眼から1筋の涙が流れた。そうして俺は眠りについた。

次の日、1学期最後の1週間

俺が、朝食を食べてると親父が来て

「今日、友人が来ることになっているんだが、あいつの娘がな早速もう学校に行くんで帰りにつれてきてくれ。確かイズミと同じ年だったと思うが。」

そんなことも俺は頭に入っていなかった。

学校に着くと早速同級生が来て何処から情報を手に入れたんのかしらんが

「イズミ、今日転校生がくるんだとよ。それも超かわいい子らしいぜ」

俺はそんなことを聞き流していたとき先生が来た。

「今日からみんなと一緒にこの学校に通うことになった子がいる。」

入りなさい。」

ほう、同じクラスか。探す手間が省けた。
なんて思っていた。

いたずら好きの神様がいるとすれば、これはまさにその神様が、
つたに違いない。

「今日からこの学校に入学しました。 黒沢 遥です。よろしくお
願います」

俺は豪快に椅子を蹴っ飛ばし叫んでいた。

「マスター？」

そういうと、ハルも俺を見て叫んだ。

「イズミツ」

おっとハルが俺に抱きついてきた。

ハルが、泣きながら

「よかった。もう会えないかと思った。」

おいおい何もなくてたねーだろ。

「ハル、ちょっとクラスの人が見てるんだが・・・」

そういうとハルが恥ずかしそうに離れてくれた。

「何だ？知り合いか？黒崎」

ニヤニヤしながら担任が聞いてきた。

ああ

クラスのやつらが俺らを冷やかしてるのがわかる。

俺が答える前に、ハルが

「許婚ですっ」と大声で叫んでいた。

クラスのみんなからうおーなどと叫びが聞こえる。

なあハルよ。

許婚ってどういうことだい？

爆弾ハルちゃん(前書き)

今回長いです。注意

爆弾ハルちゃん

それから、ハルは俺の横の席をゲットし、授業中は、まじめに授業を受けていた。

驚いたことに、ハルはとても頭がよかった。

(クソツ、弱点ないのか？こいつはよ)

俺も、悪くはないがハルに比べると・・・

ってかな、俺はまったく授業に集中できねえぞ。

サキホドのハルの「許婚ですっ」発言が、理解できん。

何だ？許婚って？

いつそんな話をした？

さっぱりわからん。

おっと

チャイムが、なった。

早速、ハルはクラスの女子に囲まれてやがる。なんかほほえましいな。

「ねえねえ黒崎君とは、どついう関係？」

おいおい

聞くのはそれかよ

もつとあるだろ？どつから来た？とかさ

俺は俺でクラスの男子に囲まれてた。

「おい、黒崎許婚ってどういうことだよ。あんなかわいい子とよお俺は素直に「さあな」と答えておいた。

「マスターってどういうことだ？」

俺ははぐらかすように「なんだろうな？」と言っておいた。

あつちでは、どこに住んでるの？と聞かれていてハルが、困っていたから

そうだ、説明しなきゃならんのだった。

「ハル、ちよつと来い」

いくら何でも今同じ家に住むことを皆に言うほど馬鹿じゃない。それにしても親父の師匠の娘ね。どーりで強いはずだ。

ハルを廊下に連れ出して、

「実はな、お前の家族は俺の家に住むことになったんだとよ。俺の親父が言ってた」

「えっ？じゃあお父さんの友人って？」

「ああ、俺の親父だ。」

そして、俺はもつとも聞きたい事を口にした。

「おまえさあ、許婚ってどういうことだ？」

そう、気になって授業に集中できないんだよ。

「そうそう、それねえあたし達が、まだ小さいときお父さんたちがお酒の席で約束したらしいよ。」

おおおおおい親父いいいい

なんちゆう事を気軽に約束してんじゃ

「でも、あたしイズミだったら良いよ。がんばって良いお嫁さんになるからねっ！」

何言ってるの？お前

俺たちまだ中学生だぞ？わかってる？

まあでも、俺もハルだったら悪くは・・・ん？

なんか気配を感じてふと後ろを振り向くと
ちやつかり聞いていたマイ・クラスメート

その中の一人が

「キヤアアー二人は同棲するんですってえええええ
いやいやちよ、黙れええええ」

「親公認かあこりゃ決定だな」
はあ？何を決定するって？

なんか皆で盛り上がってやがるってハルお前も顔赤くしてうつむいてんじゃねえ

なんかいつもの調子で言ってるやれえええ

「そついえば二人の呼び方には愛を感じるわあ」
いや、愛って？お前は黙れよ！

そんなこんなで、昼休みになった。
全く各休み時間には冷やかされまくったり、質問責めにあったりしていつもの3倍は疲れた。

昼休み、どうやらハルは給食のある学校から来たようで、弁当を忘

れてしまったということだった。

「イズミく、あたしにも食料を恵んでくださいよ〜」

「でも、俺いつも屋上で友達と食べるしな〜」

「んじゃ、あたしも行く〜」

「ならついて来い」

ということとで5分後

男3人と女1人

屋上でパンをかじっていた。

ここにいる俺の友人二人は、ほかのクラスメートとは違ってなんと
いがかまあ違っていた。

途中で買ったジュースをハルは飲んでいた。

俺の昼食用のパンからひとつハルに投げてやった。

「へへッアリガト。ってこれも105円じゃん」

うはあよく覚えてんな。こいつ

「そついえば、初めてあたし達がキスしたきつかけも105円パン
だったっけ」

「キスウウウウウ？」

おいおい、お前なあ普通そんなこと、普通言うか？

つてかお前らも落ち着けええええええ!!

「えっ何？お前やつぱり付き合ってたの？」

「落ち着け、お前らもつと冷静になってだな」

「これが落ち着いてられつかああああ」

とりあえず俺とハルは1から説明させられた。(友達が怖いと思っ
たのは初めてです)

「決めた。今日イズミの家に行くぞ。」

「おおつ2人の愛の巣に乗り込むかあ」

実はまだ、この二人にも俺の家には連れて行ってない。

「ちょっと待てよ。今日はホラ、ハルの家族の荷物整理とか歓迎と
かがあるからさまた今度つて事にしねえか？」
そういうと2人も納得したように

「まあそうだな。じゃあ今度絶対呼べよ。」

呼ぶ気はさらさらないが

「もちろんさ、マイフレンド達よ。」
言っちまったださ。

予鈴がなった。

これから掃除、5時間目、帰宅となる。

5時間目、体育

5時間目体育っていやなんだよな。俺

俺は学校では、いわゆる『弱いやつ』で通ってる。

この学校では、俺が武術に長けてるなんて今日転向してきたハル以
外知らない。

面倒ごとはごめんだ。

今日の体育は柔道だった。俺はほかのところである柔道はすごく強いが、学校である柔道はすごく弱い、というわけだ。

うちの学校は文武両道

ということ、女子の体育は体育服で柔道

男子は柔道着で、と言うわけだ。

ハイ、あっさり負けて授業終了

受け身は、しっかりしていたのでダメージはない。

皆は教室で帰る準備をしていた。

女子は、別の教室での授業を受けていたのでハルは俺が手を抜いていることを知らない。

女子から、ハルカちゃんは、強いけどイズミ君はねえーなどと聞こえたが、無視

男子からは「お前弱いんだからハルカちゃんは俺によこせよ」といわれたが、無視

さっさと帰宅するか

「ハル、帰るぞ。」

と言った瞬間

先生が息を切らして、「皆、今帰るな！！」と叫んだ。

我が担任の様子が異常だったので、クラスメートの一人が

「先生、どうしたんですか？」
と聞いた。

「今な、校門のところにはバイクに乗った人が数十人集まっているんだ」

ほお、なるほど、窓を見ると100人ほど気合の入ったニースンが集まっている。

一部任侠の仕事をしてそうな方も見える。

ん・・・

アレは、ハルと遊園地に行った帰り、絡んできたにいさんがいた。いや、見間違いかも知れないが・・・

「ハル、ちょっと。アレ」

「あちゃーお仲間さん連れてきちゃったかな」

団体さんが来たみたいというな！！

一応聞く（その後の答えが手に取るようにわかるが）

「どつする？」

「もっちろん。帰るよ。」

「いや・・・俺としては面倒ごととは嫌いなんだけど」

「なーに言ってるの。あたしが50、イズミが50でいいでしょ」
「当たり前のように言うね。こいつは

やーさんもいるんだぞ。」

仕方がない。・・・何年間も弱いふりをしてきたのも今日でやめるか。

「先生、俺とハルは帰ります」

クラス中が俺たちを見た。（これもある意味注目の的ってやつ？）

「な、何を言ってるんだ。警察の方とも連絡を取ったからもう少し待ちなさい」

うはー

先生をあわてぶりに俺は吹きそうになった。

「先生、あの人たちあたしとイズミに用があるみたいですよ」
ハル、お前爆弾発言禁止

教室を出るときこういつてやった。

「そうそう、怪我人がたくさんでそうなので救急車とタンカ、用意しててくださいね」
後ろからバカだ、とか死ぬなあいつら、とか聞こえたが、気にしない。

玄関では竹刀や木刀を持っていた先生方がいらっしやった。

先生方は俺たちに

「コラッ！！どこに行くつもりだ」

「帰るんです。それからその竹刀と木刀貸してください」
あっけにとられてる先生方から合計4本の武器をいただいた。
そして戦うときに邪魔なカバンを預けた。

竹刀と木刀を1本ずつ持って俺たちは校門へと向かった。

爆弾ハルちゃん（後書き）

え〜と

今回途中まで書いていたときにパソコンが急に切れて

1時間ショックから立ち直れなかつたです。

泣きそうになっても書いた作者を誰かホメテ

以上、あとがき終了！！

俺等の圧勝（前書き）

このページは、ほぼバトルです。
嫌いな人は飛ばしてくれても結構です。

俺等の圧勝

校門に向かう途中俺は、いつもほうきを立てかけるとこに隠しておいた俺お手製の槍も持っていった。

槍は1m30cmほど

なんかあったとき用だったが役に立ちそうだ

俺は、腰のベルトに竹刀と木刀を差し手に槍を

ハルは、竹刀と木刀の二刀流で

校門のところに行く

「お前からこの学校だったのか」

とドスの聞いた声で見たことあるにーちゃんが鉄パイプ持ってる。

「礼を返しに来たぜ。いささか多くなっちまったがな」

ヒヤハハと下品な笑い方をしながら言った。

他のやつらも金属バットや、やはり鉄パイプを持っていた。

金属バットや鉄パイプを相手に竹刀や木刀だから許されるだろう。

何を基準に判断していいかわからんが・・・

俺は

「ここじゃ学校側の迷惑になるからグラウンド行こうぜ」と言った。

あいつらもそれに従いあっという間にグラウンドは埋まった。

グラウンドは、校舎から見下せるので窓や屋上から俺らを見渡して

るのがわかる。
ぜってえーばれたな。と思いながら

「じゃっやるか？」
と言ったと同時にかかってきた。

俺は槍でもてる槍術を駆使して戦った。
ハルは、見事な動きで鉄パイプなどをよけながら確実に相手を気絶させていった。

校舎から

「すげえー」や「がんばれ」などが聞こえる。
駆けつけていた教師どももグラウンドの隅で啞然としていた。

ちょうど鉄パイプを受けたときに槍がバキバキとすごい音を立てて折れてしまった。

仕方がなく竹刀のほうを使った。

どのくらい経っただろうか？
20分？40分？もつと？

やっと50人くらいに減ってくれた奴ら。

俺とハルの足元には、それ以上のやつらが倒れてる。

「イズミツ、足元の奴等どかしってって」
やっと会話ができるくらいの余裕ができたのかハルが叫んだ。

俺も

「オーケー!!!」
と返す。

俺は、足元のやつを思いつき蹴っ飛ばしつつ応戦した。（この際手加減してられねえよ）

いつの間にか人の山ができてた。
我ながら感心するね。

と思っていると、ハルの竹刀が折れた。

ハルは、木刀1本で頑張っているようだが、難しいようだ。

「ハルッ」

と言って竹刀のほうをハルに渡した。

俺はもともと二刀流は習っていなかったので一本で十分だったのだ。

さあ、後20人と言うところで別格集団が動き出した。

ヤクザ？らしきやつらが俺に向かって鉄パイプを振り下ろしてきた。
木刀で受けたのだが、バキッと折れてしまった。
それと同時に手がしびれた。

2人目が、俺に向かって鉄パイプを下ろしたので俺は、よけた。

「ハルッこいつら別格だ。」

「わかってる！！」

と言いながらハルも苦戦しているようだった。

武器のなくなった俺は、得意の拳法で応戦した。（意地でも周りに落ちた武器は使いたくなかったね）

後五人というところで、ヤクザ？らしき人が事もあろうにナイフを出してきた。

他の方たちもたかが中学生に負けたくはないと見え、模擬刀や模造刀などを出してきた。

しょうがない。

ハルに雑魚任せ、俺は本気で戦った。

こうしてみると、本気で戦うのは何年ぶりだろうか？

っとそんなこと考えてる場合じゃない。

俺の頬を風がなでた。

とたんに俺の頬から血が勢いよく、噴出した。

相手も本気のようにだ。

俺は、隙をうかがった。

相手が、俺に向かって刀を振り下ろした。

そのとき俺は、人体の急所である水月に拳を叩き込んだ。

それと同時にもう一人も来たのでその腕をひざの上にたたきつけた。刀が落ちる。

俺は、もう片方の腕も折っておいた。

こうして立っているのは俺とハルのみになった。

「イズミッ、その傷」

「ああ、たいしたことない」
と言ったら、ハルが背伸びをして傷をなめた。

ヒューヒューと声がしたのでなんだろうと思いを上げると（忘れてたよ）大勢の中学生が俺とハルを見下ろしていた。

「ハルツ上見てみる」
と言うとハルは離れてくれた。

「お前ら、すげえぜ！」とか「格好、よかったよ」とかが聞こえてきた。

啞然としている教師たちから鞆を受け取るとやっと警察が来た。やっぱり俺たちでやっといてよかった。遅すぎだろ。

多分グラウンドで寝てるやつらの何人かは、捕まるだろう。あゝ疲れた。

「ハル、さっさと帰んねーと親父たち怒るぞ」

「イズミ、お疲れっ」
こいつ、元気だな

「ああ、お疲れ」

そついつて俺たちは帰路に着いた。

黒沢家の家族

家に帰った俺とハルは、すぐに親父に会った。

「帰ったよ。んで、連れてきた」

「ん、イズミその頼はどうした？」

「100人ほどの奴らと喧嘩した。5人ほどヤクザらしきやつらも加わっていたよ」

「そうか、もちろん倒したろうな？」

「65人は・・・後はハルが倒した。」

いや、実際もつと多かったかも知れんが、いちいち数え切れん。

「ハル？遙さんのことか？」

「そうだよ」

「そうか、やはりあいつの娘か。どうかな遙さん、この家は？」

「とつても大きくて気に入りました。」

親父はそうか、そうかといって奥に行こうとした。

「そうそう、お前を襲ったやつらがわかり次第つぶしておく」

そういって、親父は奥に行った。

挨拶などの導入部がないところを見ると、どうやら親父とハルは俺が学校行ったあとに、会っていたらしい。

しまった。

『許婚』のこと聞くの忘れた。

「ハル、そういえばお前の親父さんは？」

「さあ？黒崎家探索とか？」

と聞いていたら、兄貴と男の人が歩いてきた。

「おおつイズミ。帰ってたのか？ってお前その頬どうした？」

親父と全く一緒

「それ親父にも聞かれたよ。もう親父から聞いて。でそちらの方は？」

俺の質問には、ハルが答えた。

「あたしのお兄ちゃんだよ」

何だ、こいつも兄貴がいたのかよ。娘しか聞いてなかったがな。

「はじめまして、君がイズミ君だね。僕は、黒沢 隼人だよ」
クロサワ ハヤトね。

「隼人は俺と同じ大学で同じサークルなんだ。」
なるほど、それでか

この人からも、強いという気配？みたいなのが伝わってくる。

ってハルが強いんだから強くて当たり前か

兄貴2人と話したあと俺は、ハルの部屋（予定）に行ってみた。

ハルの部屋（予定）はまだ、ダンボールが多かった。

それから、夕食になるまで俺は、家具なんかを組み立てたりしてやった。

今日の夕食はいつもより豪華だった。

長テーブルの端と端に黒崎家現当主と黒沢家現当主が座った。

夕食の前にハルの父親に挨拶をしておいた。

ハルの父親は、親父よりも若い感じがした。

頬のところに傷があり背も俺よりちょっと高いくらいだった。

「はじめまして、かな？君が小さいときに3回ほどあったんだけだな」

すみません。覚えてないです。

「私の名前は 黒沢 龍之介、よろしくね」

「はい、こちらこそ、よろしくお願ひします」

クロサワ リユウノスケの頬をよくみるとその傷は刀傷だった。

いくつか席が空いていたところを見ると、まだ家族がいそうだな。まあこっちも、行方不明の方がいらっしやいますけどね。

夕食が終わり酒が入った親父たちに質問してみた。

（龍之介さんは駄目だ。酒でもうべろんべろんだよ）

「なあ、親父」

「ん、何だ？」

「ハルから聞いたんだけど、『許婚』って何だ？」

親父は、驚いたように

「はは、さてとお前たちを襲ったヤクザどもをつぶすかあー」とかいつて逃げた。

こりゃなんかあるな。
まあいい。保留だ。

コンコンとハルの部屋をノックする。
はーいどうぞとハルの声の中から聞こえた。

ハルの部屋に失礼するとまだ荷物の整理の途中だった。

「あつ、イズミちようどよかった。手伝って」

そついつてまた、俺は風呂の時間までハル部屋作りを手伝ってやった。

終わるころには何とか部屋の体裁になっていたから上出来だろう。

風呂は大きいのだが、1つしかないの

まず、母とハルとハルの母親が、入ったようだ。

次に親父が1人で入ったようだ。

その次に兄貴とハルの兄貴、隼人さんと希澄が入ったようだった。

上がった母に、

「龍之介さんと入ってきて」

と言われたので、すっかり酔っ払った龍之介さんに肩を貸して風呂場へと向かった。

俺は、自分の浴衣があるが、龍之介さんの着替えは？と思ったら新品の浴衣がおいてあった。

風呂に入った、龍之介さんは酔いがさめたようで、眼が元に戻って

いた。
龍之介さんの体は、傷だらけだった。そのほとんどが武器によって傷つけられたとわかる。

「あゝやっぱり傷気になる？」

俺の眼が体に向けられていたのに気づいたのだるか

「それだけ傷があれば・・・」
俺は、正直に言った。

「ハハツ、君は、親父さんに似てるね。」

「そうですかね。」

「時澄に聞いたぞ、不良100人を倒したんだってね」
驚いた。

親父のやつそんなことまで話してやがったのか

「いや、俺はちょっとですよ。あとはハルが」

「ハル？遥のこと？」

「ええ、そう呼ぶように言われてますけど・・・」

「そーか、そーか。遥にも春が来たかなっー？」
突然笑い出したよ。

今の会話に笑うとこ会った？

「いやいや、なんでもないよ。さっ僕は先上がるからね。ゆっくりね」

そういつて龍之介さんは上がっていった。

俺は、明日のことや宿題のことを考えながら風呂に使った。きつと、明日は腫れ物扱いされんだろーな。仕方ないよな。

親父の命令だったんだからさ。

俺は風呂を上がり、自室へと向かった。

部屋に入ると、クーラーをつけて机に1時間向かっていた。

宿題が片付いたので、トレーニングをしているとコンコンと誰かがノックした。

俺はドアを開けると・・・

ノック主はハルだった。

もうこの家の部屋の構造を覚えたのか？

ハルは俺の部屋に入ってきた。

この家では、寝るときに浴衣をたいてい着る。したがってハルも浴衣姿だった。

ほう、なかなか似合ってるじゃないか。

「でもいいよねえ。旅館じゃなくても浴衣が着られるなんて」

「黒崎家の習慣みたいなもんだ。」

「ねえ、イズミちよつとベランダに出よーよ。寒すぎない？ここ」
しょうがない。

俺はベランダへと続く窓を開けた。

ベランダは俺の部屋からしか入れないので、俺しか入らない。少し小さいが、二人入るには十分すぎるほどだった。

外はわりと涼しい風が俺たちに吹いた。

「ねえ、今日たった1日だったのに、たくさんのがあったね。」

「そーだな、おかげで俺は、すげえ疲れた」

「フフツあたしは、結構楽しかったけどな。」

そりゃよかったな。まあ確かに俺も少しは楽しかったがな。

「じゃ、明日も学校だからもう寝るね。」

「ああ、早く寝・・・ん」

またハルに口をふさがれていた。

あいつも眼を閉じたいたので、俺も眼を閉じてやった。

しばらくしてあいつが唇を離した。

「今度はイズミからしてね。」

それだけ言うとハルは、帰っていった。

独りになったベランダで絶対にしねーよと思いつながら部屋に入って寝た。

疲れてたのかすぐに寝ることができた。

『ダブル・ブラック』（前書き）

3日間休んだのでまたがんばります。
夏休みを有意義に・・・

『ダブル・ブラック』

翌朝、時計を確認

5時30分、家を出る時間まであと2時間と30分

そう確認すると、着替えて道場に向かった。

5時45分、俺は地下の道場で1人木刀を握り素振りをしていた。

素振りをしながら、俺は考える。

考えるのはもちろん昨日の放課後の俺たちの行動についてだ。

少し軽率すぎやしなかっただろうか？

そんな考えを脳内に居ると思われる俺がその考えを打ち消す。

昨日は、非常時だったからだ。

しかし、俺はハルが居なかったらそのような考えに移ったのだろうか？
否

ハルと出会わなかったら俺は目の前でどんなに卑劣で凶悪なことを
していても見てみぬふりをしていただろう。

ハルという人間が俺を変えつつあるのかもしれないな。

それが例え1マイクロメートル位だとしても・・・

ふと、扉の前に誰かが立っている気がした。

俺は、木刀を構え扉を開けた。

開けてみるとなんと龍之介さんだった。

「おはよう、イズミ君」

「おはようございます。」

俺も挨拶を返した。

「よくわかったね。僕が来たの」

「いえ、そんな気がしましたから」

確かに普通の人なら分かるのに、龍之介さんの場合は微かにしか分からなかった。

気のせいかと思うくらいだ。

「朝から稽古？もしよかったら僕と少しやらないかい？」

そりゃ願ってもない。

「お願いします。相手が居なくて暇でしたので」

そういいながら獲物を竹刀に変え渡した。

それから、しばらく俺と龍之介さんは打ち合っていた。

龍之介さんの、腕を一言で言う・・・絶対に敵に回してはいけな
い人、が一番近いだろう。

俺が、ほぼ本気で打ち込んでるのに龍之介さんは涼しい顔で受け流
す。

参った。勝てる気がしないね。

俺が持ち込んだ時計のアラームが、試合終了のホイッスルのごとく
道場に響いた。

「終わりだね。じゃ僕はこれで失礼するよ」

そういつて道場を出て行った。何しに来たんだあの人

時刻は7時

俺も風呂に入るべく道場をあとにした。

風呂から出た俺は朝食を取るべく食堂に向かった。

現時刻 7:30

そこにはすでにハルが制服姿でトーストをぱくついていた。

俺に気づくと

「おふぁほふ、ふいふうふい」

何語だ？それは

「口の物飲み込んでから話せ」

そういつて俺もトーストを持って、ハルの隣に座った。

「どうするよ、昨日あんなに暴れた後の学校」

「どうするって？」

何にも分かってないのか？この変わった女子中学生はよ。

「気まずいだろ。一見弱そうなのといきなり転校してきた女子がそんなに強かったら」

「別に」

そうかい、うらやましいぞ。その性格

それからトーストを食べ終わり学校の準備もバッチリと言う時に俺は気づいた。

そついや、俺等先生たちの竹刀と木刀壊したよな

そう思い、倉庫から竹刀3本、木刀3本も用意した。

只今の時刻は8:00です。

俺とハルは竹刀と木刀を持ち合って学校へと歩いた。

校門に着いたとき俺は気づいた。

朝からこんな物持って登校したら殴りこみかけてると思われないか？
やべえー

それって引かれるとか以上にまずくないか？
けーさっ来るぞ。

とか思ってるうちに、玄関へ

ゲツ、防犯対策のつもりか男性教師がずらり

なんて思っているとハルが

「センセツおはようございます。これこの前壊しちゃった竹刀と木
刀です。」
そういつて俺の手から竹刀を取った。

「おおっ黒崎、黒沢
ん？」

何だこの反応？

怒られるどころか、逆に歓迎されてないか？

「怒る？なぜ？君たちは我が校の誇りだよ」
何だ？いつからこの学校の教師の頭に何かが生まれたのかと思って
しまうくらい笑顔だった

教室にも伝染してしまってるみたいだ。

教室に入るなり友人2人が

「イズミ、お前最高だぜ」

とか言われてしまった。

うわあ、この学校何かが伝染しちゃってるみたいだ。

とか思ってたら先生が、

「今日の1時間目は集会に変更だ」

とか言ってきた。

おいおい、大体急な集会つてろくなことないんだよな。

まさか、皆変なもの何か問題がおきているのか？

と思い体育館へ行ってみたら・・・驚いたね。

制服警官が4人と一般人とは思えない眼光を放っている渋いおっさんがいた。

何？この寂れた学校の生徒の誰かが麻薬か何かをやらかしたのか？

杖を使ってようやく体育館のステージに上がることのできた校長の口から出てきた言葉が分からなかった。

しかし、そのおかげでなぜかこの集会に場違いな人がいる理由も分かった。

「え、この学校の生徒黒崎 イズミ君と黒沢 ハルカさんが、この学校を守ってくれたばかりか指名手配されていた犯罪者を捕まえてくれました。」

はあ

これを聞いた時正直校長が、ついにぼけたのか位にしか思わなかったがけーさつの方たちがステージに上がった時

えっこれマジでいつてんのか？

先生の一言が俺の妄想をマジに変えた。

「黒崎と黒沢、感謝状があるそうだからステージに上がりなさい」

俺はなんかを表彰されたなんて事はなかったから、ステージに上がる際の決まりなんかを知らなかったが何とかステージに上がって渋いおっさんから表彰状を受け取った時には夢かと思っただね。

ここで渋いおっさんから一言

「君たちのおかげで長年追いかけてきた暴力団を摘発することができた。ありがとう」

だが俺はそんな渋いおっさん（沢口と言うそうだ）の言葉をまともに聞いてはおらず俺は、ハルに会わなかったらこんなこともなかったんだよな、と黙っていた。

こうしてその集会は終わった。

それからの俺たちは、休み時間ごとに皆から囲まれていた。

昼休み、スツカリ定番となりつつある屋上に俺とハルと友人2人はいた。

「黒崎、お前が倒したヤクザ、相当前科あつたらしいぜ」

とどこから手に入れた情報か知らないが得意げにしゃべっているところは一人前だ。

なるほどだからアレほど強かったのだ。

「お前すげえ強かったんだな」

しみじみとそういわれたので

「まあ人並みにな」

「黒沢さんもすごく強かったよね」

「へっへーまあ〜ね」

「そうそう、お前ら2人あわせてなんて呼ばれてるか知ってたか？」
「どーせろくでもないんだろ」

「なんて呼ばれてんだ？」

『ダブル・ブラック』

なるほど、黒崎の黒と黒沢の黒

あわせて『ダブル・ブラック』ね。そのまんまのネーミングだな。

「誰が言ってるんだ？そんなしよーもないこと」

「皆だぜ。考案したのは俺だけだな」

お前かよ！

その無駄な思考をもっと役に立つことに活用しようとは思わなかったのかね。

まあ俺が危惧していた事が起こらなくてよかった。

俺は空を見ながら寝転んで

「平和だね」とつぶやいた。

アフタースクール

家に帰った俺とハルを龍之介さんが出迎えてくれた。

ハルは、龍之介さんが見えると龍之介さんに抱きついて今日のことを報告していた。

俺も会ってまだ間もないのに、なぜか普通に接することができる。きっと、これがこの人の持つ雰囲気なのかもなと思いつながら2人に近づいた。

「やあ、表彰されたんだってね」

やっぱり話したか

「あ、はい。感謝状もらいました」

「そう、よかったね。そうそうトキ、今日から2ヶ月出張だって」
(ちなみに龍之介さんと親父はリュウとトキと呼び合ってる。昔かららしい)

やっぱり、どうりで今日まで家に居れたのか
ちよっと、ほめてもらいたか・・・

龍之介さんが俺の頭をなでてくれていた。

「よくやったね。帰ったらトキからもほめてもらおうね」

全く予想していなかった。

すげえ嬉しかった。

今までにないくらいの感動だった。

この人あらゆる意味ですげえ

そんな感動に包まれていると、

「どうする？今日のご飯？」

龍之介さんが言うには母たちは親睦旅行（キスミは、まだ幼いので母たちについて行った）

兄2人は、今日から大学休みということで、サークルの合宿（2週間もつと伸びるかも）

というわけでしたら3人で暮らすらしい。

幸い？明日で学校が終わり44日間の休みが得られる。

しかし問題がある。

飯だ。食材は豊富にある。

が、誰が作るかという問題だ。

俺はまあそれなりだ。男でいうと中の上程度だと思う。

外食という手もあるのだろうが、あいにく俺は多人数の知らない人のある店では食が進まないのだ（デリケートなんだよ）

「とりあえず家に入ってから決めようか」

龍之介さんの一言で家に入った。

それから15分後

私服に着替えた俺とハルと龍之介さんが茶をすすっていた。

とりあえず交代で作っていくということになった。

今日は俺、明日はハル、あさつてが龍之介さんという具合にな

ハルは自分で作ると言い出したのだが、俺も世話になってばかりというのは、主義に反するからな。（何の主義かはあえて聞くな）

とりあえず、夕食は2時間後ということで作り始めるにしても1時間あまった。

ということ、俺とハルはリラクゼーション室へ行った。

そこでは、健全にトランプをして遊んだり将棋をしたりしてすごした。

俺の王があいつの桂馬に取られようとしていた時に（トランプは2回勝ったぞ）龍之介さんが来て（黒ネクタイに黒いスーツだった）

「ごめん。急な仕事が入って1週間出なきゃいけなくなった。」
と行ってすぐに出て行った。

車の音が聞こえると、3秒で聞こえなくなった。
よほど急いでいたのだろう。

そんなことを考えるとハルが、全くの唐突に

「イズミ、しばらく2人つきりだね。何しようか？」

ハルさん？

何をおっしゃってるのでしょうか？

私めには少々理解に苦しみますが

「なに言ってるんだ？とうとう変通り越していかれたか？」

「ん？2人つきりのお年頃の男女が夜ベッドの上でする運動？」

俺は読者のためにも俺のためにもハルの頭をたたいておいた。

「えっせつかく2人つきりなのに親睦を深めようよ」
はい2発目

「お前は親睦を重ねてどんな人間になるつもりだ？」

「イズミのお嫁さん」

まあいやではないが・・・いやいや何を言ってるんだ俺は

「さあそろそろ夕飯でも作ろうかな」

さあ頑張ろう。うん

「じゃーイズミの媚薬たっぷり入れてね」

何を言ってるんだ、こいつはよ

キッチンに着く。

結局ハルも一緒に作ることになった。

お互いに和食と洋食をつてわけだ

多すぎてもアレなので3品ずつということになった。

さて

俺は得意な和食を作らせてもらうか。

俺が作ったのは味噌汁、キスの焼き魚、ナスとほうれん草のおひたし
男子中学生としてはなかなかといえるできればえだね。

対するハルはというと

魚のムニエル、照り焼きチキン、シーザーサラダ

どれも完璧だった。何が弱点なんだろうなこいつはよ

早速夕食となった。

いつもの長テーブルじゃなくて小さいほうのテーブルを使って食べた。

終始ハルは、おれにひつついたままだったが気にしてたら負けなん

だろう。

ハルの料理は完璧だった。

味付け、彩りすべて非の打ち所がなかった。

それらを平らげたあと風呂の用意をし俺とハルは、ハルの部屋に行った。

風呂はたまとアラームで教えてくれるので、安心だった。

そこにダンボールの姿はなく変わりに本棚、ベッド、机、コンポ、（全部屋にある）パソコンなどがあった。別段女らしさを強調するものはなかった。

あるとするならばクローゼットくらいなものだろうか？

そこではばらく音楽を聴いたりしていた。

その時CDケースを取ろうと俺と同じくCDケースを取ろうとしていたハル

まあ結果的にお互いの手に触れてしまったわけですね。これが・・・

「うおっすまん」

いきなりで驚いたね。

「いや別に・・・」

「ねえ、イズミ私のこと、嫌い？」

なに言い出だすんだろうな？こいつはよ

「ねえ、好き？嫌い？」

「いや嫌いじゃないけど・・・」

「私は好きだよ」

そうかい。そいつぁどうも

「俺は……」

言いかねていた時、アラームが部屋中に鳴り響いた。

「うおっ」

風呂が沸いたらしい。

「じゃあ、俺風呂風呂入ってくるぞ」

そういつてその場から立ち去った。

危なかった。

何だよあの質問はよ。ツたく

風呂入って冷静になるか

さあ鍵を閉めて、と

やはり日本の風呂は最高だね。

文化のきわみというか、日本人の知恵というか

俺は何時代か分からない風呂を開発した人に感謝した。

体を洗おうかという時にガチャという音がして俺は振り向いた。

ハルがバスタオル一枚で立っていた。

おいおい、鍵かけたはずだぞ。

風呂つてのは緊急時のために外からもあけられることを思い出した。

「背中流すよ」

そういつて俺の後ろに立って背中を洗い出した。

「その前に非礼をわびろ」

「ごめん。でも・・・」
そういつてハルが口ごもった。

「でも？」
「へへっ、内緒」

そしていつしか頭を現れていた俺の背中に何か当たった。
やわらかいものだった。

「あの〜ハルさん、何か当たってるんですが・・・」
聞くのに莫大な勇気があったのは言うまでもないだろう。
それなのにこいつは

「わざとだけど？どう？やわらかいでしょ」
何を言ってるんだか

俺は湯で流された俺は、急いで風呂場から脱出した。
その後急いで着替えた。

15分後テレビを見ながらくつろいでいた俺のところにハルが来た。
「あー、もう寝るね」
そういつてハルは二階に上がっていった。

俺は、と言うとそれからしばらくニュースを見ていた。
ローカルニュース、それは地方のことを細かに伝える番組
子供のボランティアや美術館の展示会は、まだ微笑ましいが少年犯
罪や汚職などを見るといたたまれなくなると感じる俺は犯罪は起こ
さないと思いたい。
皆もそうだろ？

ふと、時計を見れば11時35分
確かに中学生が寝る時間としては妥当な時間だろう。

俺もテレビや電気を消して2階に上がった。
2階も電気を消していき自分の部屋に入った。

ベッドに入った瞬間、俺は気づいた。
だれか俺のベッドの居ないか？

いや、その誰かとは脳内会議を繰り返すまでもなく分かっている。
なぜならこの家には俺とそこに居る誰かしか居ないから
っー事で

「ハル何でここに寝てんだ？」
俺は布団を容赦なく引つ剥がしてやった。

パチツと眼を開けた。
やっぱり、起きてましたか・・・

「お前は、自分の部屋があるだろう」
「だってイズミと一緒に寝たいんだもん」
お前はガキか？精神年齢10歳以下と見たね

「明日も学校あるから早く寝なさい」
俺は、ハルを退かそうとするがこいつは全く俺のベッドから離れる
気がないらしい。

「じゃ、他のところで寝る」
そういつて別の部屋に行こうとしても浴衣を引っ張られて動けない。
どうしろってんだよ？

誰か俺にとって良い解決案あったら出案してくれ。
俺には全く浮かばん。

「早く寝かせてくれ。俺は疲れてるのだ」

そういうとハルは、自分の隣を俺が入れるスペースに空けた。

ちらりと時計を見ると、今現在12時13分

俺のリミットはまだ先だったが寝れるときに寝ておきたい。

ふーっ、しょうがあるまい。

負けだ。完全敗北。どうしようもない。

俺はしょうがなく、ホンツトーにしょうがなくハルの隣に寝てやった。

俺がベッドに入るとハルが、嬉しそうにきゃっきゃきゃっきゃ言った。
うるせーよ。

「ねえイズミ、昨日あたしが言ったこと覚えてる？」

はて、お前はしゃべりすぎだからいちいち覚えてなどいないさ。

覚えてるやつがいるとするなら間違いなくそいつは他におぼえることのない悲しいやつだろう

悪夢が来た。

「ホラ、ベランダで」

まあ言わんとしていることは45%くらい伝わってきた。

お前が言いたいのは、要するに『今度はイズミからしてね』って事だろう。

「断る」

そういつてハルとは別のほうを向いた。

その行動がいけなかったのかハルの頭がいけなかったのか？
俺は後者を取るぜ。

ハルは何を思ったか俺の首に思いっきり吸い付いてきやがった。
それほど痛くはないがそれでも跡がついたらまずいだろ

「なにしやがんの？おまえ」

ハルの方を向いたのが間違いだったのかもしれない。

黒崎 伊澄 一生の不覚

今度は頬にやられた。

「イズミがキスしてくれるまで続ける」

おいおい、新手的脅迫か？

「じゃあ一人でやってなさい。僕は寝ます」
よく言った俺

ハルに打ち勝ったぞ。

1分が立ち

2分が立ち

3分が俺の限界だった。

「だああ。分かった。分かったから」

あいつはニヤリとして

「ん、ん、ん〜なにか分かったのかな〜イズミ君」
コイツ、将来ぜってーロクな大人になんないね。
フツ、だが

「っそ、じゃあ寝るね」
笑顔で言ったら

「イズミがあたしに同じ事してくれるまであたしも朝までやめないけどね」
イヒヒって顔で言いやがったよ〜
助けて〜か〜み〜さ〜ま〜
どうしたらコイツを止められるんでしょうか？

そんなこと考えてるうちに今度はハルが耳に舌入れてきやがった。

「っっ!・・・」
どうやら俺の負けのようだ。

「ええい！わかった！キスでも何でもやってやるからやめろ」
もうやけくそだ。
だがハルは注意深く俺の発言を聞いていたようで

「何でもお？」
ちいっ

「キスだけな」

「もうっしょうがないなあ。まあ今夜はキスだけだ我慢しとくよ」
こっちはドキドキもんだってのによ

「そうそう最初5分は眼を開けたまままで5分超えたら眼つぶって
いよ」

「はあーもうどうにでもなれ
いくぞ」

唇が重なる寸前にあいつが言ったせりふを耳に残ったまま言つと
『舌を激しく絡めてね』だ。

唇を重ねあつた俺たち。

次第にお互いの舌を絡めあつ。

「んん・んん・ぴちゃ」

お互いのよだれを交換して飲む。

それが何分続いただろうか。

次第にお互い息が荒くなつていった

俺はいつの間にか目を閉じていた。

ハルのほうから唇を離した。

どうやらまだ余韻に浸つてるようだった。

口からよだれが流れてる。

俺はというと真っ白な頭で夢の世界に旅立っていた。

早朝稽古

俺は5時20分に突然夢の世界から帰還した。

いや、正確に言うと帰還せざるを得なかったのだ。

呼吸ができない。

眼をパツチリというわけにはいかなかったが、それでもうつすらと眼をあげてみるとハルが居て俺の（恐らく）鼻で呼吸できないようにしていて口呼吸はあいつの口によってできなくなっていた。

俺が、眼を開けたことが分かると（恐らく）鼻と口を開放した。

「眼、覚めた？」

起こすにしても10分やったら死ぬような方法じゃ起こしてほしくなかったな

起こす過程はどうあれ結果として起きてよかったと俺はしみじみと生きれていることに感謝した。

「もう少しまともに起こしてほしかったな」

至極もつともな感想を述べつつベッドを出た。

なぜあいつがこんな時間に俺を起こしたか？

実はその答えを俺はきのう頂いていた。

今日からなにやら俺の剣術がよろしくないと見たハルが稽古をつけてくれるらしい

拳法は合格ライン行ってたようで何より

下に下りるとトースト1枚を胃に収め木刀を持ち学校へと歩いた。

外での稽古を学校でさせてほしいとハルが校長らに掛け合ったところ快諾して許可証まで発行してくれたらしい。

学校に着いた。

当然のことながら生徒はもちろん教師たちもまだ来ていないようだった。

鞆を置いてそれは始まった。

俺たちみたいなのやつらがやると打ち合うというレベルを超え致命傷ともなりうるような激しさが出てくる。

要するに当たりや病院行きって事だよ。

7時を過ぎると生徒たちが続々と登校してきた。

そして眼が行くのはグラウンドで殺しあっているような俺たちだろう。

7時半になるとグラウンドを見ている人たちの数が半端じゃない。

ざわめきと感嘆の声が聞こえる。

だが今の俺にはそちらに眼をやる余裕が無い。

7時50分ようやく終了となった殺しあう稽古

コイツも龍之介さんに習ったのだろうか？

タオルで汗を拭きながら大勢の歓声を受けるといっなのはなかなか悪くないものでつい顔が緩みがちになる。

そんな俺を見たハルが俺の頭に木刀を叩き込んだ。

幸い？に押さえ気味だったので俺の意識は消える事もなく生き地獄を味わいつつ4時間の授業を受けることとなった。

さあ、もはや定番となりつつある屋上で男3人女一人のランチタイム
食べていると友人2人から

「お前、その顔についてるのって・・・」
そう

昨日のアレがうつすらとだがいたるところについているのだ。

「いや、打ち合っているとあざがひどくてね」

ごまかすことには何とか成功した。俺って詐欺師の素質あるかも

それから俺の家のことに話題が移った。

友人たちから要求されている家に呼べという発言に俺ではなくハルが答えた。

「でも、今家にいるのってあたしとイズミしかいないから」

爆弾が俺の脳に落ちてきた。

「お前、まさか」

待て、冷静に待て

今君たちの考えていることは誤解だ。

こうして俺は夏休み絶対家に泊めることを約束させられ電話番号という個人情報も教える羽目になった。

加えてこの電話番号が正しいことをハルが確認し俺の部屋の電話直通であることも教えたのはハルであることはいうまでもなからう。

夏休みまであと2日

今年の夏は熱風が吹き荒れる予感とともに1学期終了を待ちわびる。

黒崎イズミ、この夏を思いっきりエンジョイしてやるぜ

夏休み到来

うだるような暑さの中、体育館に密集した全生徒

うだうだと夏休みの生活について話している校長に一言言いたい

校長、残りの髪抜くぞ

さてさて、通知表も手に入れ友人の追跡も振り切り俺は44日間の
休みを得て帰路につく

もちろん、隣にはハルがこの暑さにもかかわらず元気に歩いている。

家に帰るころには行く前の体力の60%が失われていた。

例によって家には、俺とハル意外だれもおらず余計に徒労感が広が
った気がした

明日、友人二人がうちに来る予定なので今日は早めに寝ようと心に
誓った

「ゴハン食べよう」

ハルと俺はそういつて昼食を取った。

食べ終わったあとはとりあえず部屋の片づけだ。

およそ3時間ほどで部屋の掃除やら何やらが終わった。

全く、来るなんてあいつらが言い出さなければこんな苦労も無かつ
たことだろう。

(そつえば友達呼ぶのってこれが初めてだよな)

そんなことを思いながらテキパキと手を動かしていた

いつものように夕食があり風呂もこなしハルにキスしてやり明日の注意事項を言うと疲れがどっと出てきた。

俺の疲れを分かったのかハルは今日、自分の部屋で寝てくれた。

俺も明日に備え寝たかったのだが、どうにも緊張が押し寄せてきて眠れそうも無く部屋の備え付け冷蔵庫の飲み物ばかりが減っていた。

やがて3時を回ったところでようやく俺も眠りにつけた。

すぐに起こされることも知らずに

ああ、眠い(前書き)

パソコン修理完了更新スタート

ああ、眠い

「ねえ、起きて」

「ねえ、起きてっつてば」

ん、誰だよ

せっかく寝付けたっつてのに

「起きろっイズミ!!」

「うおっ!!」

目の前にハルが居た

ベッド横の時計に眼をやると現在6時17分

え？何これ？これが噂の安眠妨害？

んなこと考えてるとハルがデコピンかましやがった

「っ痛！何すんだよ！」

「それどころじゃないの！良いから来て」

別によくねーよ!!という叫びは心の中だけに押しとどめておいた。

近所に迷惑だからな

皆もご近所付き合いは大切にしよーな

ハルの部屋入室 現在6時26分

「なにがあっただよ、なあ」

「・・・ぶり」

「はあ？なんだって？」

「ゴキブリが出たのー！」

えーと、つまりだ分かりやすくまとめると、ハルの部屋にゴキブリ的生命体が出現した模様なので俺がその退治ミッションをコンプリートせねばならないというわけだ。

質問は無い？

では、スタート

俺は、最強無敵の対ゴキ専用武器 殺虫スプレーを手にハルの部屋を探索した。

まず、あらゆるものの隙間を探したが見つからない。
壁、居ない
最有力候補 ベッドの下

懐中電灯で照らし・・・居ましたよ

すかさず、最強毒ガスを使用
食らえ！！必殺殺虫スプレー30秒噴射

悪は滅んだ

「もう、退治したぞ」

死骸は、トイレットペーパーに包みトイレにさよなら

今頃は下水をさまよう旅に出てるどころだろう

「ありがとう、イズミ」

普通、泣くか？

「分かったから、もう俺は戻るぞ」

ゴキブリを怖がるとは、コイツにもそいつとこころが・・・ん？

さて、今何時だ？

薄暗い。

つか、明るい

時計を見ると、7時40分

うそだろ？

なにが悲しくてゴツキー君退治を朝までせにゃならんのだ

友人到着が、9時

あらゆる

仮説を立ててみるが俺の中でている答えがそれらすべてを打ち消す

もう起きろ、と

俺は、答えに従い眠気を振り払った『今日』を乗り切るために・・・

蝉の四面楚歌

えー、只今9時前15分

俺とハルは、リビングにてテレビを見てる。

あとは来るだけなはずなのだが、肝心の客人が来ない。

これは、友人としてあるまじき行為のひとつではなかるうか？

俺は、ゴキブリとの異種格闘技戦を繰り広げていて朝を迎え体力が持つかどうかというのにこのような行為に及んだことは断じて許すわけには・・・

電話が鳴った

友人の一人であった

「もしもし」

『黒崎？今、おまえんち探してんだけどよわかんねーからちょっと迎えに来てくんね？』

なるほど、なるほど

要点をまとめれば以下の状況だよーということだった

住所をわかってても場所がわかんねーよ

てことである。

とりあえず俺は、二人に近くのを聞き二人を迎えに行くことになった。

はあ、中学3年生が住所分かってて目的地にこれないとはゆとり教

育の弊害であろうか？

20分後、俺は初めてのお使いも完遂させる事のできないお子ちゃま二人を伴って家の前にいた

以下が第一印象らしい

「ハ？ここ日本？」

あほか？コイツは

「セレブがいるのかにや？」

ここに住んでんのは俺だぞ？

「馬鹿いつてねーでさっさと入れ」

おっと、この馬鹿たちの紹介がまだだったか？

『ハ？ここ日本？』発言をかましたのは、かなで奏・T・トライケーナ

|| たかや高谷

頭が少々赤く（外国人を祖母に持つクォーター眼が虹彩異色症（俗に言うオッドアイ）

左目赤、右目黒で非常に外国の文化を身体であらわしている奴なのである。

上記の『ここはセレブがすんでんのかにや？』という発言をした痛い奴は

なみさき浪崎 しん心

身体的特徴を挙げるなら黒髪で長髪（髪は結んでいる）、中肉中背、

以上！！物語進行再開

「おまえ、ハルちゃん居てこんな豪邸住んで〜裏で何やったらこんな金もてんの？」

奏く〜ん、人聞きの悪い子というなよ？オコツチャウヨ？ボク

「いーから入れ！ったく」

ようやく、二人を中に入れ終える。

家に居たかも知れんが外は非常に暑いと感じる。

夏はこれから？奇跡はこれから

いきがる俺を尻目に蝉の四面楚歌

これぞ日本の夏！！と十分風情を感じクーラーの効いた家へと入っていった。

台無しだな・・・

約束は転じても約束（前書き）

久しぶりに書きました。

久しぶりなので主人公の名前もろくに覚えてない始末で・・・

約束は転じても約束

「とりあえず……茶！」

ハイ、殴りましたっ……てへっ

「ああー！てめえ、人の家上がったの第一声がそれかよ？」

「だあってえー、僕ちゃん達熱い中歩いてきたんだよ？この家分かりづらいし」

頭をさすりながらたわけたことをほざく奏君

「お前なあゝそんくらいで」

「まあまあっ、お茶くらい出して上げよーよっ」

「おおっさすがハルちゃん。やつさしー！」

じゃっ、あたし持つてくるねーと元気に台所に向かうハル

男3人になったリビング

「ところでさ、お前とかハルちゃんの家族は？まさかつ、まだ二人だけとか」

うっ、痛いところついてきおった。

そうなんです。

イマモコノイエニハオレトハルシカイナインデスヨ……と言ってよいものか

「おっ待たせ、はい、ジュース」

「ありがとあー！……ぷっはあー、うめえっ」

一気に飲み干す心と奏

ここで心が先ほどの質問を繰り返した。

うわあっ、やべえ

ハル、くれぐれも無難な返答を・・・買い物に行つてるとかお仕事とか

そんな俺の願いもむなしく

「?今この家にはあたしとイズミしかいないよ」

バババババアーーン!

ゲームセツツ!試合しゅーりょー

ゆつくりと俺の方を向くゾンビ共

「イツツツミツクウーン?ふふふ、ふふふふふふ」

「落ちて着けお前ら!なに、数日後には誰かが帰ってくるさっ」

「落ち着けるかー!なに?お前、家族がいない?何やった?吐け!

吐いちまえー!夏休み、若い二人だけの家!何も無いわけなかるう」

「えつとお、まだキスだけだよ。お風呂にも一緒に入ったけど」

オマエハダマレエ・・・!

「イイイイズウウウミイイイ!!!」

こうして、わたくしこと黒崎イズミは友人たちとある約束を交わすこととなりました。

皆さん知りたい?知りたいですか?教えます。

『俺らもここに泊るぜ!ウツヒャーッヒャー!』

目玉が飛び出る予感がそこはかとなくいたします・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3505e/>

105円のキス

2010年10月11日04時39分発行